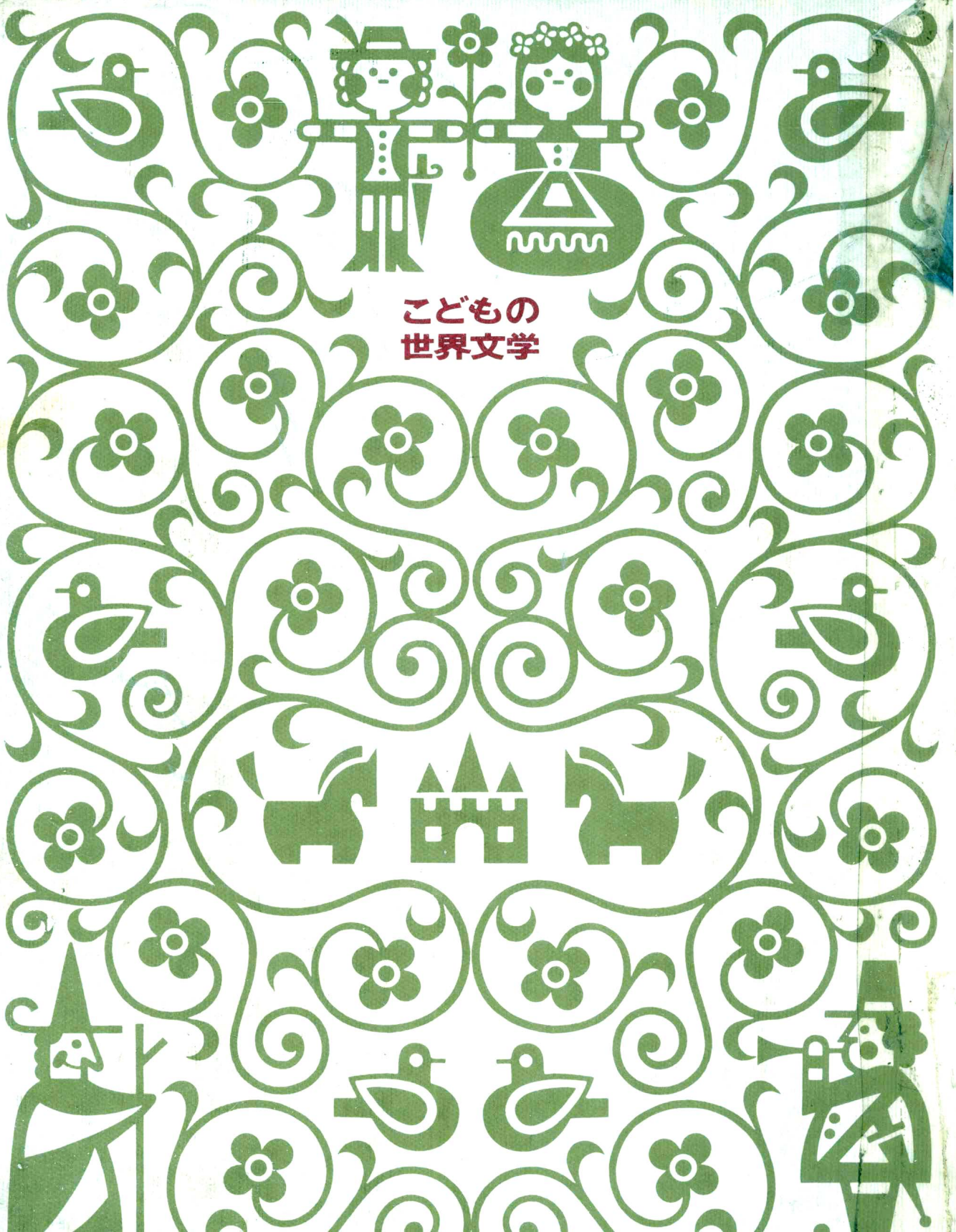


こどもの世界文学

933

アトリー，アリソン

こどもの世界文学6　神宮輝夫 ほか 編集

妖精のスカーフほか　神宮輝夫訳

The Pixies' Scarf

講談社　1973

238p　24cm

内容：　妖精のスカーフ　木をあけるかぎ　むぎ畑　野ねずみさんと，まるはなばちさん　大きなとけいと，はとどけい　ほうきの木　サムの運だめし　サムと手まわしオルガン　サムとうたう木戸

アリソン＝アトリー　Alison Uttley

こどもの世界文学6

妖精(ようせい)のスカーフほか

昭和48年2月12日　第1刷発行

昭和49年8月1日　第2刷発行

作　者　アリソン＝アトリー

訳　者　神宮輝夫(じんぐうてるお)

発行者　野間省一

発行所　株式会社　講談社

東京都文京区音羽2—12—21

電話　東京(03)945—1111〈大代表〉

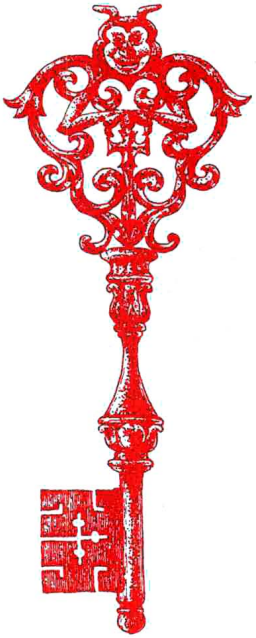
郵便番号112　振替 東京3930

印刷所　図書印刷株式会社

製本所　図書印刷株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

Printed in Japan



エジンバラ城(イギリス)

こどもの世界文学

《イギリス編・6》

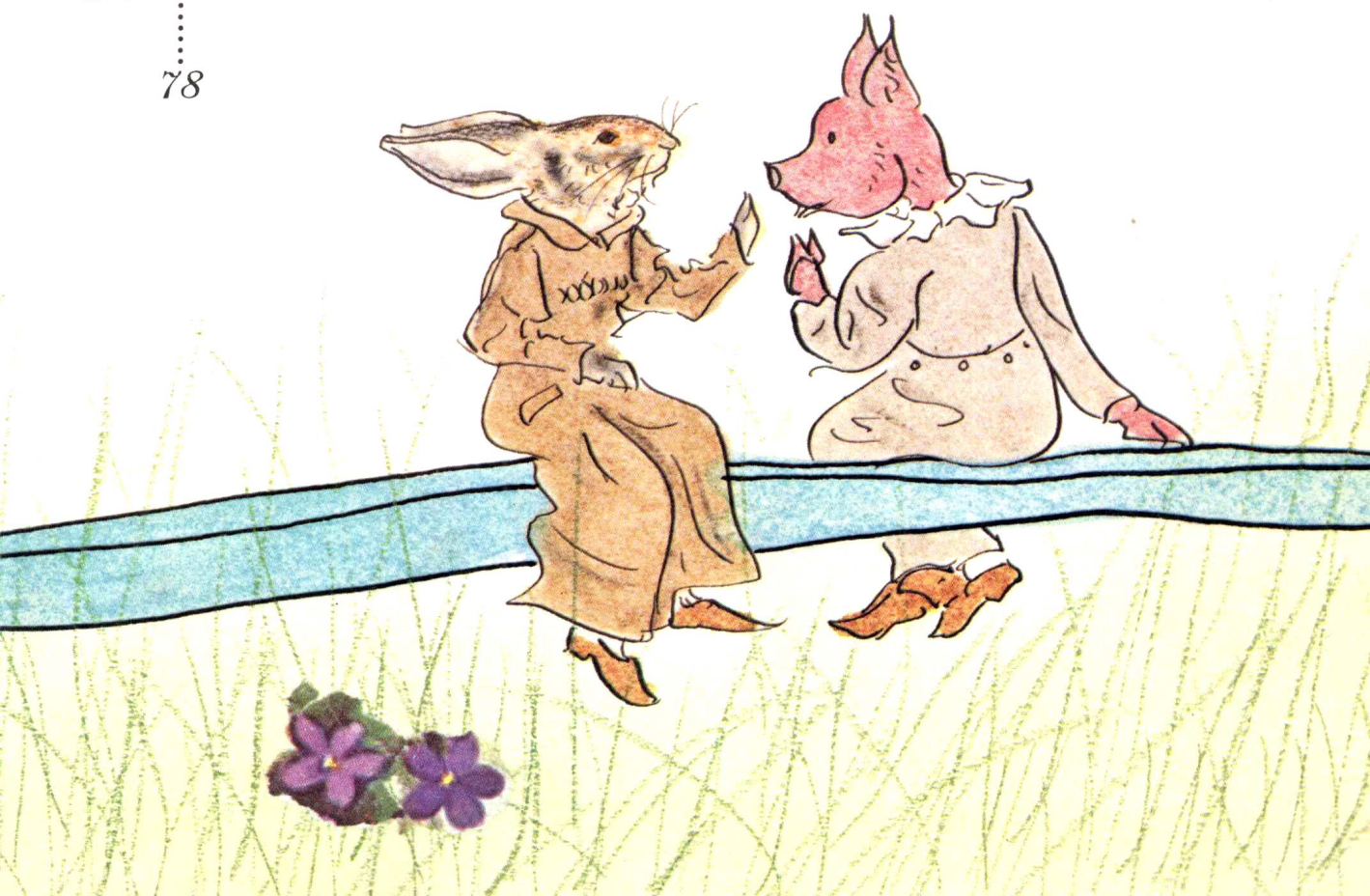
妖精のスカーフほか

アリソン＝アトリー作

神宮輝夫訳

もくじ

妖精のスカーフ……10
木をあけるかぎ……40
むぎ畑……63
野ねずみさんと、まるはなばちさん……78
大きなとけいと、はとどけい……107



四ひきの子ぶたと、あなぐまの話……119
ほうきの木……119
サムの運だめし……141
サムと手まわしオルガン……163
サムとうたう木戸……188

物語を読んだあとで

田園のまほう使い　神宮輝夫……216
海のにおいのするなかまたち　ジョージ＝クリップス……219
世界の妖精物語　神宮輝夫……221
「野ねずみさんと、まるはなばちさん」の読書会から　北川幸比古……224
おかあさんのためのイギリス児童文学史〈6〉　神宮輝夫……230
訳者・画家の横顔……234

《責任編集》
神宮輝夫
関　楠生
安藤美紀夫
塚原亮一
（日本編）鳥越　信

＊協力
イギリス大使館

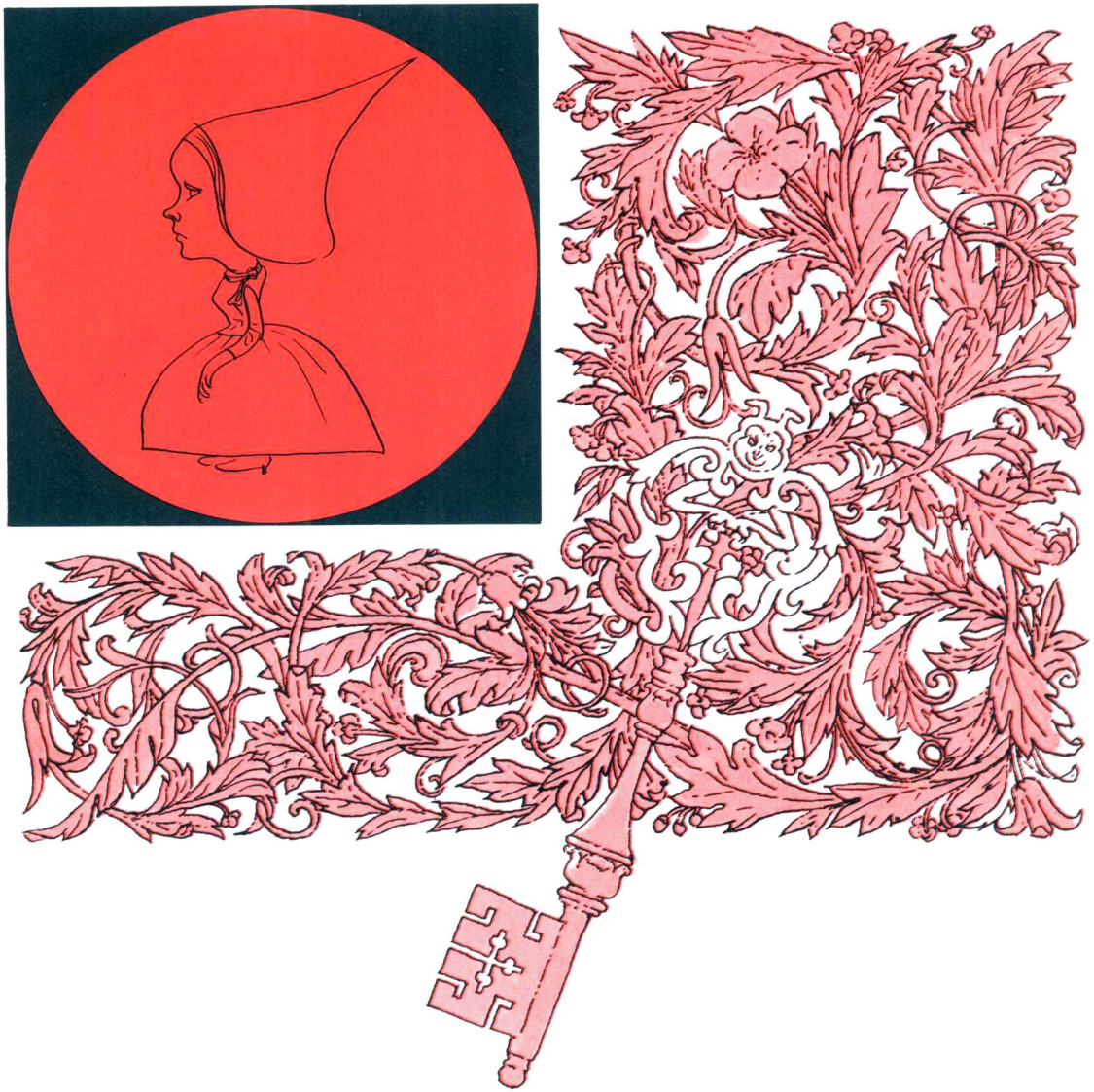
装本　大橋　正
扉　安野光雅
さしえ　小沢良吉
扉写真　井上宗和

妖精のスカーフ ほか

アリソン＝アトリー作

神宮輝夫訳

小沢良吉絵



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

妖精のスカーフ

むかしむかし、ひとりのおばあさんが、くろまめのきの実をつみに、あれ野へいきました。おばあさんは、あきかんとかごを持っていました。その二つをいっぱいにして、家にかえろうと思っていたのです。

おばあさんは、小さな男の子をつれていました。おばあさんのまごのディッキイでした。ディッキイは、おばあさんにせがんで、風のふきわたる広々としたあれ野につれてきてもらったのでした。

おばあさんは、地面にへばりつくように、何キロにもひろがる、みどりのくろまめのきだけを見ていました。

しかし、男の子は、空をとぶ小鳥たちや、流れる白い雲や、ヒース（あれ野にはえる、ひくい木）や、あれ野にそびえ立つ城のような黒い岩山などを、めずらしそうに見ていました。

「おばあちゃん、あの鳥たちは、どこからくるの？」

と、ディッキイはたずねました。でも、おばあさんは、首を横にふっていいました。

「ディッキイや、鳥なんかほうっておおき。くろまめの実をおつみよ。ここには、たくさんあるからね。たくさんだから、あたりが青く見えるじゃないか。」

おばあさんは、こしをかがめて、ほねばったやせた指で、粉をふいているくろまめの実をあつめました。やぶからつまみとって、あきかんにおとすと、ガラス玉をはこに入れるような、コトン、コトンという音がしました。

ディッキイも、青い空や、のんびりととんでいる鳥たちから目をはなすと、こいみどり色のクッションのような、こんもりした小さなやぶに目をおとしました。ディッキイは、かがみこみながら、野原のほうが、空よりももっとすてきなものが多いと思いました。

ディッキイは、赤い口に、くろまめの実をほおばり、かごにも一つかみ入れました。地面にひざをつくと、いそがしそうにあるいていく、かぶとむしや、ありが、見えました。あしながぐもは、みどりや赤の葉っぱのあいだに、せっせと巣をかけていました。

そのとき、ディッキイは、やぶのほそいえだに、なにか、一すじ、にじ色のものがか

かっているのに気づきました。

ディッキイは、はじめ、くもの巣が青やみどりや金色にそまっているのだと思いました。ところが、手にとってみると、きぬのおりものでした。草にかかっている、小ぐもの糸の輪のようにうすくて、草のつゆのように、かすかに光っていました。

「そこで、なにを見つけたのかい？」

と、おばあさんがたずねました。ディッキイが、見つけた布ぎれを指にまいて日にかざしたところを見たのです。

「なにか、とってもきれいなものだよ。」

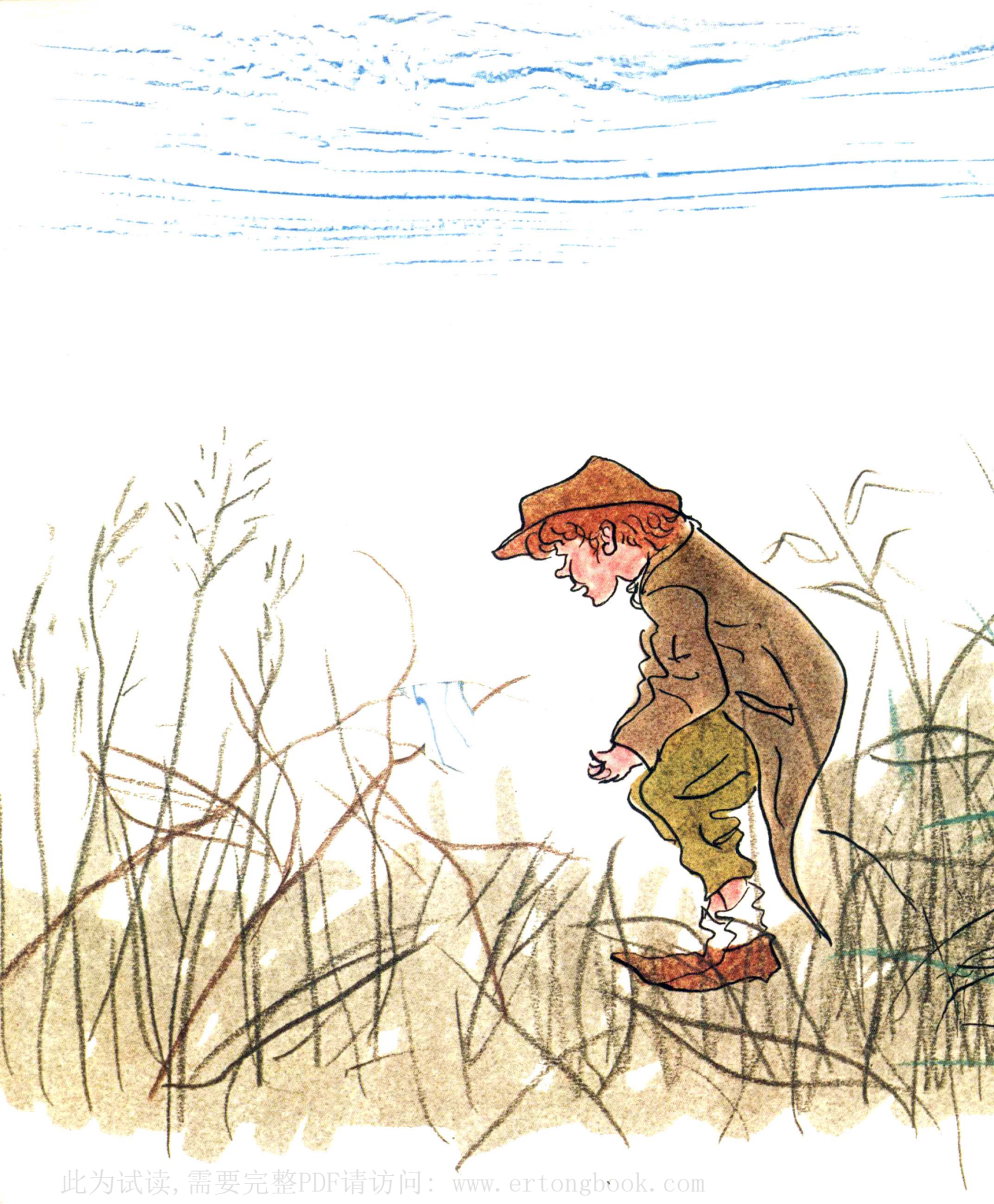
ディッキイは、おばあさんのそばまでいって、きぬのきれを見せてやりました。

「おすて、ディッキイ！　すてるんだよ！　妖精のものかもしれないから。」

おばあさんは、声を小さくしていいました。そして、だれかくるのが見えないかというように、あたりを見まわしました。

「おまえは、ピクシーのスカーフを見つけたんだよ。」と、おばあさんは、ささやき声でいいました。「もどしておおき。妖精のものにさわると、よくないことがおこる。妖精がいやがるからね。」

おばあさんは、ディッキイが、小さなスカーフをすてるまで、そばにいて、それか



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com